



道内各地で青少年育成運動に取り組んでいる方々を対象に、運動の現状や課題、今後の進め方について共通理解を深め、地域における活動の活性化を図る研究協議会を開催しました。当日は、(一社)日本ケアラー連盟の中村理事によるヤングケアラーに関する基調講演のあと、2つの分科会に分かれて研究協議を行いました。

基調講演

演題「家族のケアを担う子ども達の実態

—孤立する“ヤングケアラー”に求められる支援—

一般社団法人日本ケアラー連盟 理事 中村 健治 氏



「ヤングケアラー」とは

ヤングケアラーとは、どんな人

現時点で、ヤングケアラーについての法令上の定義は無い。日本ケアラー連盟では、「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話・介護・感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子ども」と定義している。

具体的なケア内容

料理・掃除・洗濯など家事に加え、入浴やトイレの介助といった身の回りの世話や外出・通院の付き添い・見守りなどが代表的。加えて、精神的に不安定なお母さんを慰めたり、アルコール依存症のお父さんの愚痴を何時間も聞くといった感情面のサポートもあり、ケアを要する人の日常生活全般にわたっている。また、福祉サービスを利用している場合は、ケアマネなど担当者とのやり取りや家計の金銭管理といった大人だと普通に行っていることでも、子どもには過度な緊張感や負担感を伴う専門的なケアを行っている場合もある。

ヤングケアラーになることでの影響

ヤングケアラーによるケアは、日常的、継続的であり、長期間に及ぶ場合もあり、子ども達に大きな影響を与える。その影響は、遅刻、欠席、学業の遅れといった学校生活や友人関係のほか、健康面や孤立感・孤独感など精神面など様々である。

現在の社会は、介護などケアが必要な人への支援制度はあるが、ケアラーを支援するサービスは乏しい。ケアラーやヤングケアラーに対する社会の理解と支援が求められている。

北海道におけるヤングケアラーの実態

北海道では、昨年7月から8月にかけて、札幌市立を除く道内の公立中学校2年生と公立高校2年生を対象に、ヤングケアラーの実態調査を実施したので、内容を説明する。

まず、「自分が世話をしている家族がいる」と回答した生徒の割合は、中学生が3.9%、全日制高校生が3%、定時制高校生が4.5%で、概ね4%となっており、中学校、高校の1クラスに一人はヤングケアラーがいるということが分かった。

次に、「世話をしている家族の状況」は、「きょうだい」に対するケアが最も多く、次いで「祖父母」、「父母」の順で、世話の頻度については、中学生の約6割、全日制高校生の約5割が「ほぼ毎日」と回答し、学校生活への影響についても、「自由になる時間がない」、「友達と遊べない」、「勉強する時間がとれない」といった回答があった。

また、ヤングケアラーという言葉の認知度については、子どもの9割が知らなく、学校に対する調査では「言葉は知っているが、学校として特別な対応はしていない」との回答が6割となっており、子どもと学校関係者に対する理解の促進が重要である。

ケアラー支援とは、人生を支援すること

ケアラー支援のポイント

ケアラー支援の目的は、ケアラーが心身ともに健康で、学び働き、そして人生を楽しみ当たり前の社会生活を送れるようになること。ケアラー自身があきらめることなく生活できるための支援が必要である。

ケアラーの多くは、自身をケアラーとして認識していなく、SOSを出しにくく社会的に孤立しがちなので、ケアラーを社会的に認知し、相談・情報提供など包括的に支援する体制が欠かせない。

特に、ヤングケアラーは、自身の辛さを声にせず、大人達もそのようなことを認識していないことが多い。ヤングケアラーが学業や就業、若者らしい生活や将来を犠牲にしている実態を理解し、ケアラーを孤立させない支援が求められる。

これからは、誰もがケアを受ける側かケアラーになる時代。ケアラーに対する支援を怠ると、教育や雇用機会の喪失、困窮リスク、社会不安の増大など社会的、経済的影響は計り知れない。

ケアラーに対する支援は、本人や世帯への影響だけに留まらず、持続可能で安心した社会をつくることにも繋がるということを理解すべきである。

子どもの「辛さ」に寄り添うサポート

子どもや若者が家事や介護のお手伝いをして、家族を支えることは、子どもの経験や成長につながることもある。しかし、ヤングケアラーの中には、その範囲を超えてしまい友達との遊びや部活動ができないなど、学校生活等に大きな影響を受けている子どももいる。

「家族のために頑張って、偉いね」という声かけは、子どもの「辛い、誰かに聞いて欲しい」という思いを言うことをためらわせてしまう場合もある。ヤングケアラーの声を耳と目と心で聞いて、子どもの辛さに気づき寄り添うサポートが求められている。



分科会

分科会では、話題提供者から、それぞれのテーマに関する現状や課題などの情報提供があり、その後、コロナ禍のため、グループ毎での意見交流ではなく、個人の意見・感想等をペーパーに記入し、それを会場の壁に掲示し、参加者が各々見て交流する手法で進んでいきました。参加者は、共感する意見には「共感シール」を貼り、アドバイス等は付箋に記入し意見を表明し、それを見ることで様々な意見を知ることができました。参加者からは、新しい手法を含めて「今後の活動のヒントになる」との声も聞かれ、充実した分科会となりました。

●第1分科会 テーマ「ネット社会に生きる子ども達の現状」

～子ども達をネットトラブルから防ぐために～

話題提供者 : 藤平 繁範 氏 (小樽市教育研究所 ICT支援員)

コーディネーター : 久末 考勇 氏 (石狩教育局社会教育指導班 主査)

●第2分科会 テーマ「学習格差における家庭が抱える課題」

～学びの支援を子ども達に届けるために～

話題提供者 : 高橋 勇造 氏 (NPO法人Kacotam 理事長)

コーディネーター : 石川 究 氏 (空知教育局社会教育指導班社会教育主事)

